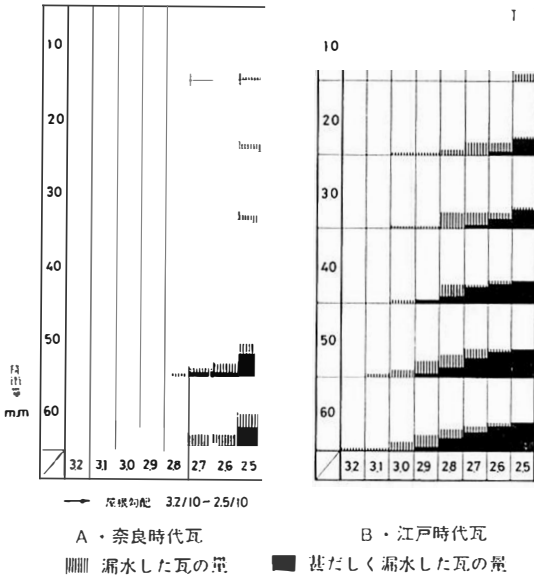


# 本瓦葺屋根の雨仕舞実験

屋根勾配と降雨量との変化によって、本瓦葺屋根にどのような雨漏り状態が発生するかを実験した。これは古建築の耐用年限がおもに雨仕舞の良し悪しによってきまるところから、その実状を把握することによって対策への足がかりをつかもうとするのが目的である。

1号実験機では15mの屋根流れ長さをもつ本瓦葺き屋根の軒先部という条件を設定した。実験結果の一部を図にあげる。Aは奈良時代瓦(長さ34cm・前山24.5・後山25.5・厚2・前谷深5・後谷深5.5・平均吸水率9.5%・葺足15) Bは江戸時代瓦(34・24.5・27・2.2・3.4・3.4・12.6%・13.5) ぐともに現唐招提寺講堂使用のものである。一番問題になる漏りははじめの時点を見ると、Aでは降雨量1時間当り10mmのときでは2.5/10勾配(葺地勾配, 以下おなじ), であるが雨量が増すにつれて当然

第1図 雨仕舞実験装置



11 てこように、この実験結果は本瓦葺屋根の勾配の限界をある程度示唆するものといえよう。

ただ、ここでは相当の影響をもつとみられる風力の問題はまったく考慮していない。これにはさらに設備の充実をはかる必要がある。また瓦葺のほかにもひわだ葺や、こけら葺、茅葺などの古建築の維持には欠くことのできない屋根葺材料もある。最近、進歩のいちじるしい保存科学部門とあいまって、これらについても実証的実験をくりかえし、よりよい文化財の保存方法を考え出していかねばなるまい。(細見啓三)